

筒井康隆

断筆宣言の

軌跡

断筆宣言の
軌跡

筒井康隆

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(〒112-11)

光文社「カッパハードカバー」編集部

断筆宣言への軌跡

1993年10月25日 初版1刷発行

1993年12月5日 5刷発行

著者	筒井康隆
発行者	大坪昌夫
印刷者	堀内俊一

東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所	東京都文京区音羽2 振替 東京 6-115347	株式会社 光文社 電話 東京(3942) 2 2 4 1(代)
-----	-----------------------------	---------------------------------------

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(ナショナル製本)

© Yasutaka Tsutsui 1993

ISBN4-334-05209-6

Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

〈著者の筒井康隆氏が断筆宣言をされましたので、井上ひさし氏に序文を寄稿していただきました——編集部〉

「われわれ」と「彼等」

井上 ひさし

他人を差別する人間にも、他人から差別される人間にもなりたくない願って生きてきたつもりだが、願いどおりに生きてこれただろうか。この本に収められた筒井康隆さんの文章を通して自分の心の中を覗き込みながら、ぼくはほとんど途方に暮れている。

たいした差別ではないが、しかし差別されたことはたしかである。たとえば戦争中、東北地方の米作地帯の真ん中にある国民学校に通っていたぼくらは、副読本として永

井威三郎いさぶろうという有名な農学者の『日本の米』（昭和十八年一月、講談社刊）を繰り返し読まされ、誦読させられた。著者の永井威三郎は作家永井荷風の弟さんなのであるが、そんなこととは当時は知らぬ、「偉い先生がえらく厄介な本を書いてくださったものだ」とぶつくさ言いながら誦読に励んだ。冒頭の一節などはまだ覚えている。

へ日本は、萬世一系の天皇陛下をいただく、世界にたぐひのない國であることは、いまさら申すまでもありません。さうして、代々萬世にわたり御位につかせたまふ天皇の御やしなひとして米をわが國のうちでお作り申しあげることとは、すなはち大君をたふとびたてまつることになるのですから、われわれはお米を體のやしなひとして、いただくのみならず、日本人としての精神、心のやしなひとしてもこれをいただくわけです。〽

そういうたぐいもなく尊いお米を作る農家は偉い、それにひきかえ非農家は半人前の穀潰しこくつぶ、その半人前の子だから、ぼくらは四分の一人前、そこで学校を通して配給されるゴム長、ズック靴、ノート、鉛筆などは、非農家の子に回ってこない、映画館では彼等が前の席、ぼくらは後ろの席、では、農家はだれからも差別されなかったか

といえ、もちろんそんなことはなく、その米作地帯全体が、中央から、汚らしいズーゾー弁を喋り立てるイモ掘りのイナカッペと疎んじられ軽んじられていた。なにしろ明治時代には、中央のお役人や学者先生から、「このへんの百姓のズーゾー弁は、いくら標準語の発音を教えたところで直るものではない。この連中の場合、咽喉に欠陥があるのだから、まず喉頭の手術を施さねばだめである」と極め付けられた土地柄、すなわち差別されている地域がその中にまた新しい差別を拵えて上から差別された怒りを下へぶっつけていたわけである。このように差別は下へ委譲され再生産されることが多い。

中学三年の秋、仙台の養護施設に收容されたが、たとえば、施設の子の弁当は真ん中にでんとソーセージが一本載っかっていたりしてどことなく不細工。炊事のおばさんは何十人分かをいっぺんに作らなければならぬから不細工になるのは当たり前だが、これが教室では格好のからかいの材料になる。ぼくらから弁当を奪い取って教室の女生徒たちに、「あいつらはこんなものを喰っているんだぜ」と中身を見せながら囃して歩く奴もいた。しかし彼にしても他人を差別しっ放しということはなかっただ

ろう。彼もまただれかから差別されていたにちがいない。なにしろ彼は、図体はでかったが、鼻の先に団子ほどもある黒子ほくろを付けていたのであり、その黒子のせいであらわれなかったはずはないのだ。

妻がいきなり家を去ったので離婚せざるを得なくなり、それをテレビにすっぱ抜かれたとき、街角でおばさんたちの一団に取り囲まれ、「ほら、この人、奥さんに逃げられたナントカという作家……」と指をさされたりもした。そのおばさんたちにしたところで、家の内と外でなにがしかの女性差別に遭っていないとはいえない切れないと思うが、それはとにかく、いずれの場合も一部分だけを見て（つまり非農家の子、施設の子、寝取られ亭主というところだけを見て）、そのことだけでこちらの全体を量ろうとする意思を感じ、それが不愉快だった。人間は多面的、それなのに一属性だけを見て、そしてその一属性だけと関連させて、その人間を丸ごと不当に扱うのはまちがっている。非農家の子、施設の子、寝取られ亭主は自分の全体ではなく、ごく一部分である。そのごく一部分だけでおれを判断してくれるな……。

けれども逆に、ぼくが他人を差別することなしに生きてきたかといえ、それはよ

ほど怪しい。現にぼくは盲人や吃音者や言語障害者の登場する作品をいくつも書いているではないか。いずれの場合も、

「このおれを盲人、吃音者、言語障害者というだけで判断してくれるな」

という主張を思い切って織り込んだつもりだが、それでも障害を持つ人たちにとってはこの上なく不愉快であつたにちがいない。こうしてぼくは差別し差別される罪深い存在であり、さらにぼくは無数の差別の網が社会全体にかけられているのを感じる。なぜこんなことになつてしまうのか。差し当たつての答はこうだ。日常生活のあらゆる局面で、ぼくらは日に何回となく「われわれ」と「彼等」を分けて考えながら生きていく。彼等の別をつけること以外に、今のところ現実世界を処理する術がないからそうするのである。そして「われわれ」と「彼等」の別を意識した瞬間、差別生産の構造が生まれる。もちろん、だから差別があるのは世の常態だと言いたいわけではなくて、にもかかわらず、ほとんど不可能と覚悟しながら、現実世界を「われわれ」と「彼等」の意識で見る本能をなんとかして乗り越え、別の見方がないものかと模索し努力する。この努力が尊く大事なのだ。筒井さんの断筆宣言は、ぼくの勝手な解釈

だが、じつはこの努力の一つのあらわれなのではあるまいか、それも作家生命を賭けた、命懸けの。

心の中ではバカにしながら外では慇懃な体裁を繕う偽善の技術、面倒なことに係わりたくないからコトバの置き換えで避けて通ろうという小手先の制度、指摘と指弾には謝罪と回収で対応してお手を拝借シャンシャンというあほらしい定型、差別語さえ口から出さなければ差別していかないのだという傲慢無礼な慣習、それらすべて愚かしきものに、筒井さんは万年筆とインキ壺を投げつけたのだ。この一冊を読み上げたぼくは、もとより自分なりの方法で、世界を「われわれ」と「彼等」と分けて考える人類古来からの病いを、乗り越えなければならぬと考えるのだが、考えるそばからそれが不可能事のように思えてきて、それで途方に暮れているわけだ。しかしそれでもやらなくてはならない。

『断筆宣言への軌跡』

目次

〈寄稿〉

「われわれ」と「彼等」――

井上ひさし

I

美濃部東京都知事の家には屑籠はあるか？

13

大日本悪人党を待望する

17

差別語について

34

冷たい鼻の駱駝

39

昔むかし、作家は悪かった

44

差別意識と市民的日常性

50

文明すべて異常心理の産物 54

おれが禁煙したら人を殺しかねない 59

倫理は堕ちた人でないとわからない 65

タブーの多い社会ほど原始社会である 70

国語の先生にモノ申す 75

おれもやりたい老年非行 81

「絶対悪」と「必要悪」 86

世論の胡散臭さ 91

ピューリタンと化したオバタリアン 96

自分の中にひそむ悪への想像力 102

明るく清潔な文壇業界に棲む魚 107

異端の排除は個性の排除 113

安吾そして文学者にとっての「悪」 118

おれは名を惜しむ臆病者 133

文芸家協会は職能集団か 138

文学者と常識 143

ボランティアの過剰な自負 148

フェミニズムと言葉狩り 154

追悼——中上健次 159

文学者の嫉妬羨望 164

日本てんかん協会に関する覚書 170

断筆宣言 180

装訂

長友啓典

K2

タイトル文字

筒井康隆

美濃部東京都知事の家に屑籠はあるか？

つい四、五日前、ひと仕事終えて、われわれ作家が電話で連絡をとりあい、飯でも食いながらゆっくり語ろうやというので、原宿の中華料理店へ行った。

「午前二時までやっテンダン」の、あの店である。

到着したのが午後の十時ごろである。この、午後の十時というのは、われわれにとつては非常に早い時間であり、普段ならまだ仕事をしていて、やっと調子が出かかったばかりの頃だ。

いつも午前零時ごろこの店にくりこんできて、わいわいがやがや、それこそ談論風発、そして午前二時に追い出されるのである。ところがこの日は、やってきてまだ料理が出そろわぬうちに、ラスト・オーダーを聞きにきたのでびっくりした。

「なんだ。もう閉店かい」

「はい。都条例によりまして、本日から十一時に閉店でございます」
われわれは憤慨した。

ああ、美濃部東京都知事のピューリタニズム政策ここに極まれり、即ち都知事はわれら深夜に働く精神労働者の生活を破壊せんとたくらむものであるか。

一千万人の人間がひしめきあうこの大都会で、その人間たちを夜から締め出したらどうなると思う。昼間が大変なことになるのである。

ラッシュはますます激しくなり、のべつ人間があふれている状態になり、頭はがんがん痛み、ものを考えることができなくなる。われわれが、夜はたらいっている理由も、それなのである。これ以上、昼間の人間がふえ、夜の外出を禁じられたら、ぼくなどは仕事が完全にできなくなってしまう。

精神労働者に限らずとも、だいたい文明国の首都ともあろう大都会で、いかに住宅地区といえど、十一時以後ものを食う店がなくなるなんてところは、ワシントンを唯